いなほ

令　和　４　年　９　月　１　日
令和４年度学校だより NO.24②
加古川市立平荘小学校

地域の皆様に支えられています

今日から２学期が始まりました。登校時には、それぞれの地域で子どもたちを温かく見守っていただき、子どもたちが安全に登校することができています。ありがとうございます。

また、環境体験学習では、子どもたちが夏休みで学校に登校していない間も、毎日、子どもたちが育てている（田植えをした）イネのお世話をしてくださっている地域の方々がいらっしゃいます。田んぼの水の管理から除草まで、本当によくしていただき、支えていただいています。ありがとうございます。

見えないところを想像する力を！

子どもたちには、直接見えていることだけで判断するのではなく、見えないところでも自分たちを支えてくださっている存在に気付き、感謝の気持ちがもてる子に育ってほしいと願っています。

例えば、田んぼのイネの成長を目にした時に、「大きく育っているな」と思うだけでなく、「ここまでイネが育ったのは、毎日、田んぼの水の管理をしてくださっている人がいるからだなあ。」とか、「草が生えてないのは、誰かが草を刈ってくれているのかな。」と、自分の見ていないところで自分たちを支えてくださっている（自分たちのために動いてくださっている）存在に気付ける人になってほしいなと思っています。

はるかのひまわり情報

この夏も、『はるかのひまわり』は、元気に育っています。もちろん、毎日、水やりをしながらお世話をしてくださっている人がいるからです。早い時期に咲いた『はるかのひまわり』は、種ができてきています。後から種を蒔いた『はるかのひまわり』は、今、元気に花を咲かせています。『はるかのひまわり』の花をながめながら、震災のこと、命のこと、防災のこと等々、たくさんの大切なことを心に留めてほしいと思います。

今年もたくさんの種が収穫できそうですね。

ふるさと意識を醸成する教育

子どもたちに、ふるさとを誇りに思い大切にする気持ちがもてるように、そして、自分が生まれ、育ち、住んでいる地域への愛着がもてるように、伝統文化・芸能の体験や環境体験学習等をすすめていきます。そして、活動を通して、ふるさと意識を育てています。

６年生：いよいよ狂言学習が始まります

平荘小学校は、『狂言の学校』と言っても過言ではないぐらい、子どもたちは『狂言学習』を楽しみにしています。毎年、６年生になると、狂言学習を行い、最後には狂言発表会という形で狂言学習の総まとめをします。

今年度は、狂言学習をはじめてから２２年目を迎えます。狂言学習の長い歩みの中で、地域の皆様には大変お世話になっております。平成２８年には、平荘狂言教室後援会が発足しました。以降、全面的なサポートをいただいております。あわせて平之荘神社の皆様にも大変お世話になっております。

毎年、子どもたちは、先輩が築き上げてきた伝統（狂言）を引き継ぎ、後輩へとつないでいくことを自覚し、主体的に取り組みます。

今年度も、地域の方々に支えていただきながら、山口耕道先生の熱いご指導のもと、子どもたちが力を発揮してくれることをとても楽しみにしています。

山口耕道先生と打ち合わせをしました

８月２３日（火）に、山口耕道先生と今年度の狂言学習について打ち合わせを行いました。今年度の狂言の練習は、１０月２７日（木）が第１回目となります。子どもたちには、１２月７日（水）の狂言発表会（予定）に向けて、精一杯力を発揮してもらいたいと思います。

≪山口耕道先生のお話≫

●狂言は、６年生の子どもたちが、自分たちでやったと思える感触が得られるものになります。演目を、一緒に創り上げることが、伝承していくことにもつながります。創り上げる過程が大事です。

●自分たちで創り上げるということは、すごいことです。伝わるものがあります。

●練習も大事ですが、舞台に立つ（本番を経験）することが、何よりも貴重な体験です。レベルアップする機会となります。

●演技をする際には、真似するのもよいが、狂言の形として決まっていることを一旦壊して、自分たちで創り上げていくと（自分の言葉にしていくと）、狂言の表現が自分のものとなっていきます。
セリフを覚えるだけだとそんなにしんどくありませんが、狂言の言葉や表現を自分のものにしようとすると、自分がかわらなければ自分のものにはならないのです。苦労しますが、身に付いていきます。子どもたちには、これを体験してもらいたいのです。

●演技者は、やらされているだけではおもしろくありません。自分たちが演技をしている（やっている）という意識をもつことが重要です。演技者（自分たち）が一生懸命に取り組むと、やった分だけ必ず観ている人から得るものがあります。それを実感した時に、おもしろさを感じるのです。

●発表会のあいさつに、「感動を伝える」という言葉を使うことがありますが、「感動を伝える」という言葉はおこがましいと思っています。「感動を伝える・与える」よりも、「感動することができる」人になってほしいと思います。

●舞台に立ち、観に来る人のいる有難さも感じてほしいです。

●狂言は、コメディーです。狂言は、室町時代から伝わる伝統芸能です。話の筋はあっても、表現は自由です。話の中で、主人に物申すことが多い（おもしろさ）のも狂言です。

●後見の役割も重要です。後見は動くと、演技者の邪魔をすることになります。後見は目立たないけれど、観客には観られています。後見の存在は、「目立たない」「気にならない」「違和感がない」存在として舞台上にいるのです。隙を作らないことが重要です。

●（毎年言っていますが、）いかに学ぶか（学び方）が一番大事だと考えています。